（二〇一五年度）

3 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は19ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

AK-A-03

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

思想の理解にとって人から最も閑却されているのは、思想の文学的形態であるように思われる。第一、書くという行為において、思想家は必ずしもその考えられたものを書くのではなくて、なかには考えるために書くものもいる。考えられた事柄を書くという場合にも、精密科学的な記載形態のように何らかの建築的構成の枠のなかへ思想をはめ込んで整えてゆくスピノザの『エチカ』のような行き方もあれば、考えが浮かぶにつれてその着想をしるしてゆくアミエルの『日記』や、その着想に何度も帰ってはこれを改竄し増補してゆくパスカルの『パンセ』のような行き方もある。また[1]自らの思想の成立経路を自叙伝的に、しかもひどく韜晦的、闕語的に叙述しているデカルトの『方法叙説』のようなのもあれば、一時代の全精神生活を壮大な「思想的ドラマ」の形で総決算しようと企てているライプニッツの意味でエクレクティックなプラトンの『対話』のようなのもある、等々々。

それらに対して、いま私が考えるために書くと言った性質の思想家は、書きながらあるいは書くにつれて考えるあるいは考えを生み出す思惟活動の形式に従う人々で、[2]その表現形態はモンテーニュの『エセー』のように、全く文字通りの意味で「随筆」と名づけられるべきものであろう。

「随筆」と「随想」とはわが国一般の用語例では殆ど同義語になっているが、これは私たちの考えでは全然異なった思惟方法に立脚した別のジャンルなのである。だから、モンテーニュの『エセー』は、厳密には「随筆」であるが、しかし「随想」ではないと言われる。それはあくまで筆に随って、想が産出されるのであって、想に随って筆を動かすのではない。私の敬愛するO氏がかつて私への手紙の中で警抜的に言われたように、[3]それは随想録ではなくて、むしろ随録想であろう。

かくて、思想家のうちには、書くということが考えることであるようなそういう「随筆家」型があるものなのだ。ところでもしわが国においてそのようなタイプに近い思想家を求めるならば、――多くの人たちは意外に思うかも知れないが――それは西田幾多郎先生ではなかろうか。そして西田哲学において、多くの解釈家、批評家たちからいちばん見遁されているものも

――それはまさしくこの哲学者のフィロソフィーレンにおけるこの「随筆」的性格であるように思われる。

4 もっとも西田哲学の芸術的性格ということは、これまでもしばしば口にせられてはいる。けれどもそれは私の考えでは、「文章が詩的なリズムをもってい、」「考え方のうえでも、その引例からみても頗る芸術的なところが多い」から、「小説に接するような感興と魅力とを以て読むことができる」(本多謙三氏)という点にあるのでもなければ、また「科学的概念の代わりに文学的表象を愛するというあの人間的偏愛癖の上に」西田哲学が成立しているという論者のいわゆる「論理上の文学主義」(戸坂潤氏)にあるのでもない。却って考えるために書く、もしくは書くことが考えることになっている思惟の随筆性にそれがあるのである。というのは、それは一般に芸術家の書く行為における発想の仕方でもあるから。芸術家においては、アランが正しく指摘しているように、観念が製作に先立ってこれを精確に規整してゆくのではなくして、むしろ製作するにつれて観念が「湧いて出る」のであるから、考えたことを書くのではなくして、書くにつれて考えが生まれてくるのである。(そして断わるまでもなく、このことは彼が製作にかかる以前に既にある一定の考えを頭の中で作ってこれに臨んでいることを少しもさまたげるものではない。)天才的作家の芸術的実践は――彼らが自らそれと反対の自己解釈を下しているときにおいてさえ――上のことを実証している場合が多い。

7 西田哲学はその発想形態においては決して完結した思想体系を示しているものではなく、むしろエッセイである。エッセイであるが故に、そこには――譬喩的に言ってよいなら――仕事場の雰囲気が常に漂っている。というのは、あらゆる思想的産出の材料や道具や工程的努力そのものがそこにはむき出しにさらけ出されており、整理され終わったものではなくして、整理されてゆく過程そのものが如実にいわば「即物的」にあらわれているからである。いわゆる生の哲学ではないのに、その形而上学が生の匂いを濃厚に発散しているのは、このようないわば「手仕事」のあとが生の波状線をそのままに生々しく伝えているからであろう。西田哲学が体系であろうとしながら、一向にそれになり切らず、素人眼には、いや玄人の眼にさえ「繰り返し」と見えるものがうるさく附き纏っているのも、だが、しかしそれと共に凝結的に固まらず、いつも未完結的な、流動的な発展曲線を示していていささかも動脈硬化症に陥っていないのも、それがためであると言えよう。

ついでながら言えば、西田哲学の性格の一つはその飽くことなき観念遍歴にあって、その若干の思想的モニュメントは在来の何らかの哲学体系との対決の形をとっているが、ここでも既成体系を辿ることそのことが考えること、つまり書くことになっていることが注意せられねばならぬ。読むことがそのまま考えること＝書くことなのである。[9]だから、西田哲学の幾つかのモニュメントはある意味でこの思想家の読書録でもある。この点にも『エセー』の著者モンテーニュとの一つの類似が認められるわけで、ただモンテーニュにおいては、その忍耐強い、逞しい書物遍歴がより享楽的であるのに対して、西田先生においてはそれがより探求的であるという相違があるだけである。

[10]西田哲学の文学的形態がエッセイであり「随筆」であるということは、その哲学の把握においてそれに照応する一定の「文学的」態度を、その研究者の側に要請する。ちょうどプラトンの『対話』から首尾一貫した哲学体系をたぐり出そうとする素朴な鈍重な態度が従来の夥しいプラトン曲解のもとであったように、哲学的随筆ないし随筆的哲学にもありふれた論理主義的作品に立ち向かうような屈伸性のない紋切型の態度を以てしては、その本質に迫ることは到底できないであろう。

哲学と名のついたものなら何でもかでもそれで眺められるという眼鏡があるわけではない。それだのに、多くの人々は――しかも「批評家」と自称する手合いが案外その仲間であるのには驚くが――出来合いの眼鏡で、しかもピントさえろくろく合わせもしないで、どんな哲学でも千篇一律に眺めるから、それについて言うことはみんなひどく見当はずれの「ピンぼけ」になるのである。[11]最近の西田哲学の解釈や批判にもこのような強引なやり方が少なからず見受けられるが、「哲学史」と銘のうたれた教科書的概観の類には遺憾ながらこうしたやり方が常習になっていることが指摘されなければならぬ。だが、哲学の文学的ジャンルないしスタイルは、哲学の研究においてそれほど無視せられてよい零であろうか。[12]思想の肉体性の感得は――少なくともある種の思想のダイナミックな理解や批評にとって――それほど些細な枝葉的事柄なのであろうか。

（林達夫「思想の文学的形態」）

〈注〉ライプニッ…一六四六～一七一六。ドイツの思想家。
エクレクティック…折衷主義の。
西田幾多郎…一八七〇～一九四五。哲学者。
フィロソフィーレン…哲学すること。
アラン…一八六八～一九五一。フランスの哲学者。
モニュメント…不朽の著作。

問一　傍線部1について、「韜晦的、闕語的に叙述している」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　読者に不親切な書き方で、文中の単語が他の単語と照応しがたい記述になっているということ。
b　難しく理解しがたい書き方で、文中に自分の思い入れの深い単語を忍ばせる記述になっているということ。
c　文章の脈絡が煩雑な書き方で、文中の単語が何通りもの解釈を生みかねない記述になっているということ。
d　包んでごまかす書き方で、文中に単語が抜け落ちているように感じられる記述になっているということ。

問二　傍線部2について、「「随筆」と名づけられるべきもの」とはどういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　表現形態が思惟活動の形式に従って成立しているもの。
b　書く行為を遂行することによって考えが生成するもの。
c　思想を自らの精神生活に融和させ表現したもの。
d　浮かんだ考えを修正せずにそのまま記述したもの。

問三　傍線部3について、「随録想」とはどういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　書きとめることをしながらでき上がった考え。

b　自由な思考が反映されている書き物。

c　書き記すに価する考えをまとめたもの。

d　着想を練り上げてつくられた思想。

問四　傍線部4について、筆者は「西田哲学の芸術的性格」をどのような点にあると考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　西田の思考が、芸術家が書くときに目指す読み手への配慮を保有し、しなやかに遂行されている点。

b　西田の思考が、芸術家が書くときに基盤としている自由性を色濃く持ち、感興を重視している点。

c　西田の思考が、芸術家の書く行為における発想の仕方と同一で、書きながら考えを紡いでいる点。

d　西田の思考が、芸術家の書く行為に見られる随筆性と近似しており、自在な展開を示している点。

問五　傍線部5について、「論理上の文学主義」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　思想の表現に際して、科学的概念よりも文学的表象に肩入れしているということ。

b　科学的概念で構築しなければならない哲学に、それを揺るがす文学的表象が使用されているということ。

c　哲学には愛情が大切であるとして、科学的概念ではなく文学的表象を多用しているということ。

d　科学的概念よりも文学的表象の方が論理を伝達しやすいとの考えのもとに、哲学を構築しているということ。

問六　傍線部6について、筆者がこのように考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　芸術家に製作以前にひとつの考えがあった場合、その考えがゆるがないように統御してゆくから。

b　芸術家に製作以前にひとつの考えがあった場合、次の手順としてその考えを詳細に記述してゆくから。

c　芸術家に製作以前にひとつの考えがあっても、書きながらその考えは新たに作り変えられてゆくから。

d　芸術家に製作以前にひとつの考えがあっても、常に反対の考えをもって相対化してゆくから。

問七　傍線部7について、筆者が西田哲学を「むしろエッセイである」とする理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　西田哲学には、観念を直接表現することを避ける生の哲学が目指されているから。

b　西田哲学には、体系をつくることを急がず考えを丁寧に記述する意図があるから。

c　西田哲学には、その思想形成に関わる材料が秩序正しく並んでいるから。

d　西田哲学には、その考えが整理されてゆく経路が生々しくあらわれているから。

問八　傍線部8「玄人の眼にさえ「繰り返し」と見えるもの」を筆者はどのように考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　西田哲学の体系が成立することに対してそれを阻害するものと考えている。

b　西田哲学が思想の弾力性を失わないことに貢献しているものと考えている。

c　西田哲学の「即物的」な性格と同等の価値をもつものと考えている。

d　西田哲学が「手仕事」の要素をもっていることを証明するものと考えている。

問九　傍線部9について、「ある意味でこの思想家の読書録でもある」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　既に存在する思想を発展させたものが西田哲学の中核を形成しているということ。

b　既に存在する思想を解釈しながら西田哲学は生成したということ。

c　既に存在する思想に反対することによって西田哲学の特質が鮮明になっているということ。

d　既に存在する思想と手を結ぶことによって西田哲学は生まれたということ。

問十　傍線部10について、「それに照応する一定の「文学的」態度」とはどういう態度か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　ありのままに感受する敏感な態度。

b　文章の背後にある筆者の感情を汲(く)み取る態度。

c　柔軟性のある、形式にとらわれない態度。

d　論理に対峙(たいじ)する忍耐強い態度。

問十一　傍線部11について、「このような強引なやり方」とはどういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　哲学を、文学に還元する態度で解釈したり批判したりすること。

b　哲学を、万能性の高い理論を援用して解釈したり批判したりすること。

c　哲学を、自分の熟知している方法で解釈したり批判したりすること。

d　哲学を、すでに流通している思考の枠組みで解釈したり批判したりすること。

問十二　傍線部12は、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　思想がもっている生理的な特質を感得することは、思想の理解において本道を外れたこととは思われないということ。

b　思想がもっている論理性以外のものを感得することは、思想の理解においては二次的なものであるということ。

c　思想がもっている発想の痕跡（こんせき）を感得することは、思想の理解においてその手がかりとなると思われるということ。

d　思想がもっている未完結的な部分を感得することは、思想のトータルな理解において欠かすことができないということ。

二

次の文章は、『平家物語』の一節で、一の谷の合戦後、屋島に逃亡中の平家一門に対し、「内侍所」(三種の神器)を返納するならば捕虜となった平重衡(「中将」)を解放する旨の後白河法皇からの院宣と共に、重衡の書状が届く場面である。これを読んで後の問に答えよ。なお、ここで「二位殿」は、重衡の母の平時子(「故入道」平清盛の妻)、「大臣殿」は平宗盛(時子の子、重衡の兄)、「平大納言」は平時忠(時子の弟)、「新中納言」は平知盛(時子の子、宗盛の弟、重衡の兄)である。

大臣殿・平大納言のもとへは、院宣のおもむきを申し給ふ。二位殿へは、御ふみこまごまと書いて参らせられたり。「[1]いま一度御らんぜんとおぼしめし候はば、内侍所の御事を大臣殿によくよく申させおはしませ。さ候はでは、この世にて見参に入るべしとも覚え候はず」などぞ書かれたる。二位殿はこれをみ給ひて、とかうの事ものたまはず、ふみをふところにひきいれて、うつぶしにぞなられける。まことに心のうち、さこそはおはしけめとおしはかられて哀なり。

さる程に、平大納言時忠卿をはじめとして、平家一門の公卿殿上人、よりあひ給ひて、御請文のおもむき僉議せらる。二位殿は中将のふみを顔におしあてて、人々の並みゐ給へる後ろの障子をひきあけて、大臣殿の御前に倒れふし、なくなくのたまひけるは、「あの中将が京より言ひおこしたる事のむざんさよ。[2]げにも心のうちにいかばかりの事を思ひゐたるらん。[3]ただ我におもひゆるして、内侍所を都へかへしいれたてまつれ」とのたまへば、大臣殿「誠に宗盛も、さこそは存じ候へども、さすが世のきこへも、いふかひなう候ふ。且つは頼朝がおもはん事もはづかしう候へば、左右なう内侍所をかへし入れたてまつる事は、かなひ候まじ。其うへ、[4]帝王の世をたもたせ給ふ御事は、ひとへに内侍所の御ゆゑ也。[5]子のかなしいも、様にこそより候へ。且つは中将一人に、餘の子ども、したしい人々をば、さておぼしめしかへさせ給ふべき歟」と申されければ、二位殿かさねてのたまひけるは、「故入道におくれて後は、かた時も命いきてあるべしとも思はざりしかども、主上、かやうにいつとなく旅だたせ給ひたる御事の御心ぐるしさ、又、君をも御代にあらせまゐらせばやなど思ふゆゑにこそ、いままでもながらへてありつれ。中将一の谷で生どりにせられぬとききし後は、肝たましひも身にそはず。いかにしてこの世にていま一度あひみるべきとおもへども、夢にだにみえねば、いとどむねせきて、湯水ものどへ入れられず。いま、このふみをみて後は、いよいよ

思ひやりたる方もなし。中将世になき物ときかば、われも同じみちにおもむかんと思ふ也。ふたたび物をおもはぬさきに、ただ我をうしなひ給へ」とて、をめきさけび給へば、まことにさこそは思ひ給ふらめと、哀におぼえて、人々涙をながしつつ、みなふしめにぞなられける。新中納言知盛の意見に申されけるは、「三種の神器を都へかへし入れたてまつりたりとも、重衡をかへし給はらん事ありがたし。ただ、はばかりなく、その様を御請文に申さるべうや候ふらん」と申されければ、大臣殿「此儀尤(もつと)もしかるべし」とて、御請文申されけり。

（『平家物語』巻第十）

〈注〉○御請文…院宣への回答　○主上…安徳天皇　○君をも御代にあらせ…「君」はここでは宗盛を指す。

問一　傍線部1「いま一度御らんぜんとおぼしめし候はば」の意味として次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　もう一度読み返したいとお思いでしたら。

b　もう一度私に会いたいとお思いでしたら。

c　もう一度法皇に会いたいとお思いでしたら。

d　もう一度都を御覧になりたいとお思いでしたら。

問二　傍線部2「げにも」には、ここではどのような意味が込められているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　命乞いなどしそうにない重衡がこんな手紙を送ってくるのは、よほど苦しみ抜いた末のことであろうという推測。

b　重衡が三種の神器の返納を要請するとは、平家一門に対する裏切りであるという深い失望。

c　自分の命は二の次にして三種の神器を第一に考える手紙の内容で、それでこそ我が息子であるという誇り。

d　手紙に書かれた事が余りに残酷で、法皇が内心何を考えているか想像も付かないという恐れ。

問三　傍線部3「ただ我におもひゆるして」の意味として次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　私にだけは気を許して信用して。

b　私だけに責任を負わせる事にして。

c　私の心情をおしはかって。

d　私だけに院宣に回答させることを許可して。

問四　傍線部4「帝王の世をたもたせ給ふ御事は、ひとへに内侍所の御ゆゑ也」の意味として次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　帝王が君臨なさっているのは、三種の神器を護（まも）るというただその目的のためです。

b　帝王が君臨なさることが可能なのは、三種の神器があるというただその理由によってです。

c　帝王がこの世で保持しておいでなのは、ただ三種の神器のみです。

d　帝王の現在の状況は、ただ三種の神器を保持する都合から生じたものです。

問五　傍線部5「子のかなしいも、様にこそより候へ」の意味として次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　子供の哀しみの深さも、子供によって様々です。
b　子供への愛情の深さも、人により様々です。
c　子供の哀しみも、状況によっては緩和されます。
d　子供への愛情も、状況によっては抑制すべきです。

問六　傍線部6「ただ我をうしなひ給へ」の意味として次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　私の苦況を取り去って下さい。
b　私がいないものだと思って下さい。
c　私の意見を無視して下さい。
d　私を殺してしまって下さい。

問七　傍線部7「人々涙をながしつつ、みなふしめにぞなられける」は、人々のどのような心持ちを表現しているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　二位(母)のあまりの悲嘆により、自らの苦境があらためて思い知らされて意気消沈する。
b　二位(母)のあまりの悲嘆が大臣(宗盛)達には逆効果で、これでは更に苦境に陥ることになりかねないと危惧する。
c　二位(母)の悲嘆はもっともであるが、その意見に賛同はできない。
d　二位(母)の悲嘆はもっともであって、その意見に賛同する。

問八　傍線部8「知盛の意見に申されけるは」について、次の問に答えよ。

1　「知盛の意見に申されけるは」とは、誰がどうしたのか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　知盛が母を諌(いさ)める意見を述べた。

b　知盛が母の見解を補強する意見を述べた。

c　母が知盛の見解への対案として意見を述べた。

d　大臣殿(宗盛)が知盛の見解への私案として意見を述べた。

2　「意見」の内容はどのようなものだったか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　三種の神器を返納しても、重衡が解放されるのであれば十分引き合うので、率直に感謝すべきである。

b　三種の神器を返納すれば重衡が解放されるというのであるから、それには率直に感謝すべきである。

c　三種の神器を返納しても重衡が解放されるとは思われず、返納は断固拒否すべきである。

d　三種の神器を返納すれば重衡が解放されるという点の確約を、遠慮なく求めて行くべきである。

問九　後白河法皇が編んだ歌謡集を次の中から一つ選べ。

a　琴歌譜

b　新猿楽記

c　新古今和歌集

d　梁塵秘抄

三

次の文章は幕末の儒者・塩谷宕陰が舅である十束井斎に書き送った書状の一部である。これを読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

一日繙朱子文集。王近思問、「顔子在陋巷而顔路甘旨。[1]有闕、則人子不能無憂。顔子方不改其楽。必有処此矣」。朱子曰、「但学道窮理、常不間断、則物欲之心自不能勝。而本心之義理安且固矣。[2]此重則彼自軽。別無方法、別無意思也」。読此三復、大息曰、嗟乎、仕非為貧也。而有時乎為貧、古所謂禄仕是也。[4]学非為産也。而有時乎為産、吾今日是也。[5]与其憂愁百端別思方法、竟無所成、不若専吾所好、[6][7]敷学相長、以為養親之助。含垢匿瑕、靦然坐皐比者八年于茲矣。不幸家慈溘焉棄世。因復以為僕之屈志於舌耕者、徒以親在耳。[8]今親以天年終、則宜

託シ二孥ドヲ於丈人ニ一、入リ二国黌コウニ一、以テ大中成ス志業ヲ上。然レドモ親亡クナリテダ未レシテ期ナラ、遽ゼントシテ撤スルハ二先人ノ旧廬ヲ一、跡類ス二不孝ニ一。僕非ズレ不ンバハレ思レ之ヲ。

（塩谷宕陰「与十束翁書」）

〈注〉○王近思―人名。朱子の弟子。　○顔子―人名。孔子の高弟である顔淵のこと。　○顔路―人名。顔淵の父親。　○斆学―相長―「斆」は「教」に同じ。教えることと学ぶことの相乗効果で学問が進むこと。　○靦然―あつかましいさま。　○皐比―師が講義をする席。　○家慈―母親。　○溘焉―にわかに。　○孥―妻子。　○丈人―妻の父。　○国黌―昌平坂学問所を指す。

問一　傍線部1「甘旨」、傍線部4「禄仕」の意味としてもっとも適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選べ。

1　a　自足
　　b　お世辞
　　c　立派な志
　　d　ごちそう

4

a　一時的で不安定な就職

b　給金を目的とした仕官

c　高収入の仕事

d　武士としての登用

問二　傍線部2「此」、傍線部3「彼」はそれぞれ何を指すか。次の中からもっとも適切なものをそれぞれ一つ選べ。

a　貧

b　陋巷

c　物欲

d　窮理

e　義理

f　闕

問三　傍線部5「吾今日」はどのような生活なのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　家族を養うために塾を開き、学問を切り売りするような不本意な生活。

b　年老いた親を養うために、気に入らない主家にも我慢して仕える生活。

c　不如意であるが、家族に支えられながら、学問に打ち込む清貧の生活。

d　傾いた家産を立て直すために学問をあきらめ、家族と商売に励む生活。

問四　傍線部6「与其憂愁百端別思方法、竟無所成」の書き下し文としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　其の憂愁百端と別に方法を思ひ、竟に成す所無ければ
b　其の憂愁百端別に方法を思ふ与めに、竟に成す所無くして
c　其の憂愁百端別に方法を思ひ、竟に成す所無きよりは
d　其の憂愁百端に与りて別に方法を思ひ、成す所無きに竟れば

問五　傍線部7「専吾所好」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　貧しさや将来の不安など振り切って、ひたすら学問に励むこと。
b　愛する親や妻子を幸せにしてやることを何より優先させること。
c　己の学問の正しさを信じ、他の分野や手法に惑わされないこと。
d　家族と暮らす我が家を愛し、よその土地に行ったりしないこと。

問六　傍線部8「耳」を他の漢字二字で置き換える場合、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　云爾
b　而已
c　也哉
d　矣夫

問七　この書状の内容と合致するものを、次の中から二つ選べ。

a　宕陰は「朱子文集」を読んで昌平坂学問所に入り学問を究めようと決心した。

b　宕陰は学問に専念するために、十束井斎に妻子を一時預けるつもりでいる。

c　宕陰の母は亡くなったが、父は健在であるため、昌平坂学問所入校の決心ができないでいる。

d　宕陰は、親が亡くなってからそれほど時間が経たないうちに、旧居を処分することにためらいを感じている。

e　宕陰はあれこれ迷っているくらいなら、いっそ親のために働くべきだと考え、八年間学問を離れていた。

f　宕陰は、彼の申し出に対して、親不孝な振る舞いだと批判的な十束井斎を何とか説得しようとしている。